

「幼児の教育」六月號を讀みて

大塚喜一

五〇

『幼児の教育』の本年六月號は、東京女子高等師範學校附屬幼稚園保姆諸彦の手記せられたる保育日誌が滿載せられて居り、更にこれを書かれたる方々の精神が一層よく我々讀者に理解せられ更に出來得べくば實行に現はし得る様に主事倉橋先生の『はしがき』が畫龍點睛的に光つてゐる。殊に『幼稚園は生きてゐる』といふ文字を以て書き始められてゐる事が、恰もこの一冊の雜誌がさながら生ける使者の如く、參謀本部即本隊から第一線に活躍せる戰士に對する傳令の如く、日本全國の各園に於て同じ心を以て今子供達の爲に精進しつゝある保姆各位保育關係各位に對して『我等は斯の如く生きてゐる。卿等はこれを如何に受取らるゝか。いざ心を一にして共に生きんかな』と呼びかけられてゐる様な氣がする。ありのまゝを忠實に客觀的

に子供達と先生自身とを靜に觀て記してゐられる中に、教育者としての絶えざる心づかひが動いてゐるこの生活記錄は、實際家諸賢各地各人各様に必ず何等かのひびきを傳へ反響を起してゐることであらう。小生もこの日誌に表現せられたる實際の情景をお察し申上つゝ興深く讀ませて頂いた。

殊に本年は大阪及東京に於て度々倉橋先生の御講習を拜聽するの好機に恵まれたおかげで、その中に力說せられたる中心精神が現にお茶の水幼稚園に於て實現せられて居り且絶えずその實現に努力せられつゝある事を明に感得して保育の眞諦も亦實に茲に存すとうなづかれる。斯くして本誌を始めて手にした時の感激と共鳴とが、時を経て再三熟讀する毎に更に深く彌々高まつてゆくのを覺える。今その

主なるものを次に書きしるして見よう。

先づ、全體を通じて最も鮮明に力強く感得せられるのは先生は幼稚園へ來られるとすぐ（或は前日から）子供たちの生活を誘發すべき活動を開始せられて居りそこから其日の幼稚園がうまれて來るといふ事である。勿論子供達は來るとすぐ各自の自由遊を始める事が多いであらうが、それが幼稚園としての積極的教育價値を發揮して來るのはこの先生の生活の賜である。子供だけでは教育なしの生活だけになり（その生活もどこまで存續發展するかむつかしい事もある）、先生が出過ぎれば教育のかけに子供が押込められてしまふ。その何れにも偏らないで、先生と子供との二つの生命が融和共同して一つになつて働いてゐる所に「幼稚園は生きてゐる！」のだと思ふ。

六頁の「子供達の眼は一樣にそちらに向いた……」からこの日の日誌の終まで讀んで、この子供と共に生きる動きが潑刺と感ぜられる。「けしの花を描きませうね」と云はれた表面の目的物はいちごからあぶへと段々に移つて行つてはゐるが、其中に動く子供心に従ひつゝこれを守り育てら

れて行く有様が「子供等は聞きながら暫く見入つてゐた」「その姿はこゝの所よ……こつくりと頷く」等にハツキリと讀まれる。殊に「子供等の顔に動いたかすかな表情をつかまへてお繪書きを始めた……」と終に書いてゐられるお心に至つては眞に敬慕に耐えない。嘗て或る先生が僕に「私は幼稚園へ來た時は子供が自分の云ふ事をきいて呉れるのがうれしかつたが、此頃は自分が子供に従つてゆけるのをうれしく思ふ様になつた」と云つて下さつた事はどれ位大きな力となつた事か。それについて思ひ出さるゝのは、福島政雄先生著『ペスタロツチーと女子教育』の序文「女性の本質と使命」の中に直観性について述べられたる左の一節である。

「直観とは如實の相を見る事である。兒童を概念型によりて理解する事ではない。正しく兒童の個々の心想事成に入つてその生命の如實の相に觸れる事である。而して女性としての母はかゝる點に於て實に偉大なる能力を有するものである。生命と生命とが相照らすともいふべき直観の第一程は實に母が子供等に對する關係に於て成立つ

のである。……

更に進んで人間の生命と生命とが相觸れるといふ事を考ふれば、女性に於ける直觀の力の意義は更に重大となるものである。凡そ人間の生命と生命とが相觸れるといふ事が相對的の意味に於て少しでも成り立つとすれば、それは情意の世界に於てである。知の世界に於ては互に理解するといふ事はない。或る意味に於て知はむしろ人間と人間とを隔つるものである。然るに直觀といふものは知の世界に於て融化の味をもたらすものである。隔ての世界から融化の世界へのかげはしとなるものである。情操及意志は生命から生命へ流れ入るものである。それは言語といふ概念の形式を通さずして流れ入るものである。生命が生命を視る、生命が生命を聴く、生命が生命を感ずるといふべきものである。而してかゝる情意が知をうるほすときそこに直觀性が鮮に動き出るのである。理智の冷かさが情操の温かさになる、ほふのである。こゝにはじめて人と人とが生命に於て相觸れる事になるのである。かゝる世界無くしては教育といふ事は眞實の

意味に於ては成り立たないのである。故に女性はその直觀性を以てして教育の樞機にあづかるといふ最も重大な意義を有するのである。』

大阪での講習で「子供に『何泣いてるの？』『何怒つてるの？』等と尋ねる事は、今起つてゐる情緒を意識させる弊が起る」と承つたが、尋ねないで其場合に適切な人間交渉が開かれてゆくにはどうしても斯かる直觀性が必要になつて來るのではないかと思ふ。「子供に従つてゆく」といふと何でもない事のやうだが、實はその中にこまやかな心づかひが動いてゐる。機會の捕捉、共鳴、欲永の充足等の保育法の原則が保育態度の上に事實體現されて來るまでには、この『直觀性』が基調となつて保母と幼兒との心の通ひ路が次第に開かれて來たやうに思はれる。川の組の日誌の終りの「お辨當を幼稚園では食べないと……つくく〜時期の問題だと思ひます」(三三頁)にはかうした眞に保母らしい尊い努力がまさしくと現はれて居る。又、年少組をお受持の新庄先生の日誌中にも「かたくなに結ばれたる小さき心の、日を追ひてとけゆくを見るは保母ならでは

味ひ得ぬことなるべし」(二七頁)「よく育てられて來し子等よとあらためて顔々見まはしたり」(四一頁)等に此間の情景が美しくも表現せられてゐる。生きた保育がここまで浸潤し徹底しその先生の心の光となつて輝いて來るまでには如何に多くの苦心が秘められてゐることか。斯くてこそ甫めて「ちよつとは強く泣いても母に歸つて貰ひたるにすぐ泣き止みたり」(三三頁)なる自信ある態度に頭が下る心地がする。尙同先生は文語體で書いて居られる中に云ひしれぬや、さしみがにじみ出てゐるやうに感ぜられるのもゆかしき限りである。

次に、断片的ではあるが僕が特に感じた點を順次に述べやう。

十一頁始の「嫌！」とにべなく断られた……元の遊びに歸つて行つた」にて先生の計畫と幼兒の興味とが調和し難きは何故かと疑問であつたが、「人形のお家から……直しに引返す」の如く互の調和に入り、更に十二頁の「いつの間にか入つて來て靜かに塗つてゐるのである」に至つては先生の用意せられた環境に子供から自然に入つて來て安任せ

る様、眞にうるはしき光景である。同じ心の喜びは二〇頁の「白木の自動車でもこんなに喜んで呉れるのかと涙ぐましくなる」の前後に潑瀾と湧き起つてゐる。製作といふ方法を用ひつゝもそれを幼兒の世界の法則に従はしめ、毎日辛抱強き努力を續けて來た甲斐あつて、専門外の大人の目には何の感興をも起しさうにないこの自動車が媒質となつて方法に於ては間接教育の原則を遵守しつゝ保育の本質に於て保姆と幼兒との心が相觸れ合ふこの境地！「思へばこの自動車もよくこゝまで來たものだ……」とは何といふ尊い實感であらう。この夏僕は東京の講習に出席の際お茶の水幼稚園にて實物を見せて頂いた時、成程これが「私たちの自動車」かとおつづく見入つた。そして本誌に記された實景を眼のあたりに見るやうな心地がして。顔まで塗料だらけにして夢中になつて塗つてゐる様！「先生、自動車乾いた？」と來るなり尋ねてゐる子供！ホントに子供たちの生命の一部分としての生ける自動車である。この自動車が中心となつて幼兒達の製作衝動即ち生活々動がむくむくと湧き起つて來る時、其處に幼兒の天國は開かれ保育の理想

境が出現する。僕は、五月號の拙稿「基本教育としてのおはなし」に於て到達したる境地が斯くして製作に於ても實現され得るといふ生きた事實を學び得しことを深く感謝する次第である。此事實は保姆諸彦の日常に切實なる感興を惹起することと信ずる。

二〇頁の「食後も自動車遊びが続いてゐた。私は其れを、氣を付けながらそばでヘッドライトを作る。」先生の生活により幼児の生活が誘導促進されてゆく光景がよく現はれてゐる。子供にとつては、想像的な遊びの際にはあまり大人が目立たないのがよい、しかも先生が私達(子供)の側に居られるので安心して私達の遊びに没頭出来るといふ心地だらう。先生も子供達の遊ぶ様を觀て靜かに學ばるゝ事が多いであらう。「氣をつけよ、手はつけるな」といふコツは此處だな！と思はれる。「今日は牧場の羊の唱歌をする豫定であつたがあまりよく遊んでゐるので、そつとグリーンボールに歌だけ書いておく」美しい光景である。

此處を讀んで僕は成城幼稚園に居た時の事を思ひ出した。その頃、お茶の水幼稚園へ何かの會で御伺した折「大

塚さん、組をお持ち下さうですがおはなしをよくなさるでせうね。毎日？週に何回位？」と尋ねられた事がある。用意はしてゐても丁度みんなを集めておはなしをするに適當な機會がなか／＼見出せない。僕の組は僅か十三名の小數だつたが、それでも遊びの興味の動きと没頭の程度とが各々の個と群とによつて違ふので、計畫的にさおはなしとやるのは雨でも降つた日位、一週一回か二回位のものだつた。前は自分も度々したいと思つてゐた事もあつたが、實際に當つて子供に忠實でありたいと思へば、そう度々出来るものではない。豫定はあつても現前の生活姿態の動きに應じてこれを活用してゆくべきである。保育者の有する知識、經驗、性能等すべてが未發のまゝに靜かに時を待ちつゝ、我を虚しうして子供の心の動きに従ひつゝ動く時に生ずる必要に應じてのみ、間髪を容れずして活用されて行く處に、方法に於ては消極的にして教育者としての働きが過不足無なき十全の實効を擧げる事が出来るのである。

二一頁の負け嫌ひのM子さんは「いゝわよ、ぶりだつて、上手な人は、後で書くのよ」とは、よくもこんな思ひ返

せたものだといぢらしい氣がする。又、何だか女の子らしい感じがする。これが元氣な坊ちゃんだつたら泣くか怒るかして亂暴な破壊的行動に出やしないだらうか？「一番先に！」と熱心に求める生活々動の趣く處、その「純」を斯かる場合どう伸せばよいだらうか。此點特に倉橋先生の御教示を乞ふ。

二六頁の「後に下げるお人形」とは實に細かい所迄觀察注意が行届いてゐますね。或はこのお子さんの興味が特にこういふ方に敏感なのだらうか。

二八頁の川の組の日誌の始めを讀んで「直接行動と號泣」に又成城での生活を思ひ出す。「口よりも手が出る喧嘩好き」といふ様に江戸ツ兒の手が早い、少しも油斷のならぬのには僕も閉口した。それを「個別より群へ」と遊びの愉快を味はしむる事により、内面的に勢力の淨化整調に努められつゝある苦心の程に敬服する。二九頁より三〇頁への没頭した姿が殊に懐かしい。

三二頁「遊戯。しないと納まらない。」とはいふね。

三四頁「朝は一人づつに言葉をかけたきもの」

三五頁「今日も朝の一時を大騒ぎに過すことゝ覺悟して來たるに少々氣ぬけの形」。いづれも斯道に精進せられつゝある新庄先生の意氣込み——誠意のあふれたる御言葉である。先生の日誌を讀んで三浦修吾先生著「第二里を行く人」(玉川學園發行)が思ひ合される。

四五頁の「少し形勢不穩のため……どこで遊んでゐる人も皆見えてよい」の様に、兩方に氣を配る事が必要だが、實際には多年の經驗による熟練の上に更に努力を要する事だとしみじみ感ぜられる。「及川先生はお母様よ」飯事のお母様だけでなく、ホントによい幼稚園のお母様となつて子供のお相手をしながら、あのしとやかな慈眼を以て君臨してゐられる様が偲ばれる。それなのに「そのうちにMちゃん……大さわぎにかはつた」とは？「同時に二ヶ所以上にて事故の起る位、困つたことはない」實に保育はどこまで行つてもむづかしいものだ、しかし僕は思ふ、物事は結果に依て評してはならぬ。其人の其事に對する態度如何が大切なのだ。『自分が子供たちを豊かに見守りつゝ十分の餘猶を持つてゆつたりしてゐられる場合と、子供たちに追ひ

廻されるやうに漸く其要求に應じつゝ辛うじてやつて行ける場合と、他からは大した相違も見えないだらうが自分の主観からは實に雲泥の相違ですな」と先輩の一人が云はれた事を思ひ出す。

五二頁の「唱歌や遊戯のあつた日には、いつでもあとで考へさせられる」から次頁上段へかけて、この問題についていつも御苦心の様である。年少組こそ未分化の層深き時期！この時期の幼児の性情に受くる影響感化が保育の淵源を爲すものであるを思はゞ、この問題は極めて重大である。原始的生活性を十分に發揮せしむる事を殊に都市の幼稚園に於ては主とすべきが故に、年長組の様を一齊にする律動表情等の所謂遊戯はむしろ大に削減して、貴重な時間を自由遊に讓るべきであらうか。御教示を乞ふ。

池の組の日記にも「製作のよろこび」があふれてゐる。前に述べた讃辭を同様に捧げたいと思ふ。その中にて特に僕の心をひきつけたのは五六―五七頁の地下トンネルの製作である。これについては僕には懐かしい思ひ出がある。小學二三年の頃だつたか、郷里から電車で二十分で行ける

濱寺の海岸近くに家を借りてあつたので土曜の午後から出かけて日曜終日、こうした「穴掘り」に夢中だつた。親戚の子供たちが丁度よい遊び相手だつたので實に面白かつた事を今でもよくおぼえてゐる。日曜の晩迄興盡きずして泊り、翌朝起され、ぬむい目をこすつて登校した事も度々あつた。おかげで「没頭性」の例として砂遊びの事を話されると衷心共鳴するし、又幼稚園でも主として砂場で子供と共に遊ぶ愉快が今迄續いてゐる。

以上、僕が諸先生の日記を讀んで感じた所考へた所等をそのまゝに述べさせて頂いた。萬一誤解して居る様な事あらばすぐ訂正して頂かなければならない。更に斯く感じ斯く考へた所を糸口として、筆者たる諸先生方から再三いろいろと聞かせて頂けるものと期待する次第である。斯くして互に本誌を守り育てゝゆくことにより、日本全國幼稚園關係者の聯絡提携の機關たる本誌の使命が益々發揮せられ『吾等の雜誌・幼児の教育』として日々の保育の糧となるであらう。吾人は全國各地に心を同じうして毎號本誌を愛讀せられつゝある讀者諸士と共にその日の來らむことを待望しつゝこの項を終りたいと思ふ。(昭和七、八、二九)